

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「1. 記号と意味作用」 pp.66-73
(2017-10-18)

池上嘉彦 著 「III. 創る意味と創られる意味— 意味作用をめぐって
—」、『記号論への招待』

担当： 石井 拓洋
takuyo.ishii @ gmail.com

2017

「伝達」と「意味作用」 p.66

コミュニケーションには 「メッセージ」 が必要である

コミュニケーションの特徴

- 「メッセージ」 の授受が行われる
- 「メッセージ」 とは 〈伝達したい〉 ことが記号化されたもの
- 表現 (「表に現す」 こと) が先行する (c.f. 38)

(c.f. 66)

※ 「メッセージ」 は 「メディア」 によって伝達される

「伝達」と「意味作用」 p.66

「メッセージ」は「意味作用」を持つ

「メッセージ」

= 「それがなんらかの他のことを表しているものによって構成」

= 「メッセージ」には「意味作用」が存在する

※ 「意味作用」が存在するならば「メッセージ」にもなる。

= 「コンテクスト依存のコミュニケーション」（受信者中心）の記号

「意味作用」

= 「あるものが何か他のものを意味している」という作用 (c.f. 31)

「記号」と「記号機能」 p.67

「記号機能」とは？

「記号」とは？

■ 「記号機能」とは？

- = 「あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表している時、
その働き」のこと (c.f. 67)

■ 「記号」とは？

- = 「記号機能」を担っているもの (c.f. 67)
- = 「符号」と呼ぶべきものを超えていくようなもの (c.f. 3)
- = 人間が『意味あり』と認めるものはすべて『記号』 (c.f. 5)

※ ある面では、「記号」や「メッセージ」の語の部分を「作品」と読み替えるよいのでは(石井)

「記号」と「記号機能」 p.67

「記号機能」とは？

「記号」とは？

■ 「コードに基づくコミュニケーション」 の場合

= 「記号」の概念が優先 > 「記号機能」の概念が従属

例)

1. この「トン・ツー」は疑いなく「記号」だ。
2. この「トン・ツー」はモールス信号の「コード」に準拠しているからだ。
3. なので、この「トン・ツー」自体には、何かの意味を有しているはずだ。
4. では、その「記号」にはどんな意味があるのかな？
5. 「コード」に基づき「トン・ツー」の意味を探る（「記号機能」を探る）

「記号」のほうが「記号機能」に先立って存在する（「記号」が優先する位置づけとなる）。

「記号」と「記号機能」 p.67

「記号機能」とは？

「記号」とは？

■ 「推論」に基づくコミュニケーションの場合

= 「記号機能」の概念が優先 > 「記号」の概念が従属

例)

- 1 葉が落ちている。
2. 一般的に、「風が吹くと、葉が落ちる」ものだ。
3. ここに「葉が落ちている」のは「風が吹いた」のを意味しているのでは？(推論)。
4. ならば「葉が落ちている」ことは、意味をもっている(「記号機能」あり)。
5. したがって、「葉が散っている」ことは「記号」となる。

「記号機能」のほうが「記号」に先立って存在する(「記号機能」が優先する位置づけとなる)。

シニユ (言語記号)

- ・シニフィアン = 「記号表現」

ex.) “inu” という 音 (本来は音)。

+

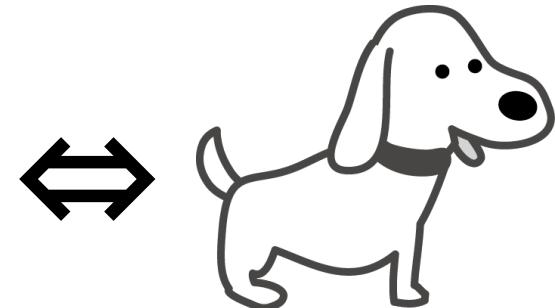
犬

- ・シニフィエ = 「記号内容」

ex.) 日本語でいう「犬」という「概念」

- ・しっぽの生えた
4本足で歩く生き物

- ・その生き物**それ自体**



「記号表現」と「記号内容」 p.68

「記号表現」(シニフィアン)、 「記号内容」(シニフィエ)

【注意！】

※ 「シニフィアン」とは、本来「聴覚イメージ」のみを示すもの。

(c.f. ソシュール『一般言語学講義』影浦ら訳、p.118)

※しかし、池上『記号論への招待』では、「シニフィアン」は、
聴覚に限らず、感覚で捉えられるイメージ全ての意味で使用される。

「『記号表現』は、われわれの感覚に訴えるような対象である」

(c.f. 池上『記号論への招待』p. 72)

「記号表現」と「記号内容」 p.68

「記号表現」(シニフィアン)、 「記号内容」(シニフィエ)

「シニフィアン」と「シニフィエ」は 相互依存関係にある。

→ いずれかが無いと、「記号機能」は成り立たない。

「記号表現」と「記号内容」の非対称性 p.69

「シニフィエ」(概念)に対する「シニフィアン」(聴覚イメージ)の優位



「シニフィアン」(聴覚イメージ)



「シニフィエ」(概念)



「シニフィアン」(聴覚イメージ)



「シニフィエ」(概念)

「記号表現」と「記号内容」の非対称性 p.69

「シニフィエ」(概念)に対する「シニフィアン」(聴覚イメージ)の優位



「シニフィアン」(聴覚イメージ)



「シニフィエ」(概念)

※ まず概念自体が存在して、そこから記号 (=表現されたもの) が生まれるのではない。
(言語名称目録観の否定)。 その意味で、上記2つが対等ということは常にはない。



「シニフィアン」(聴覚イメージ)

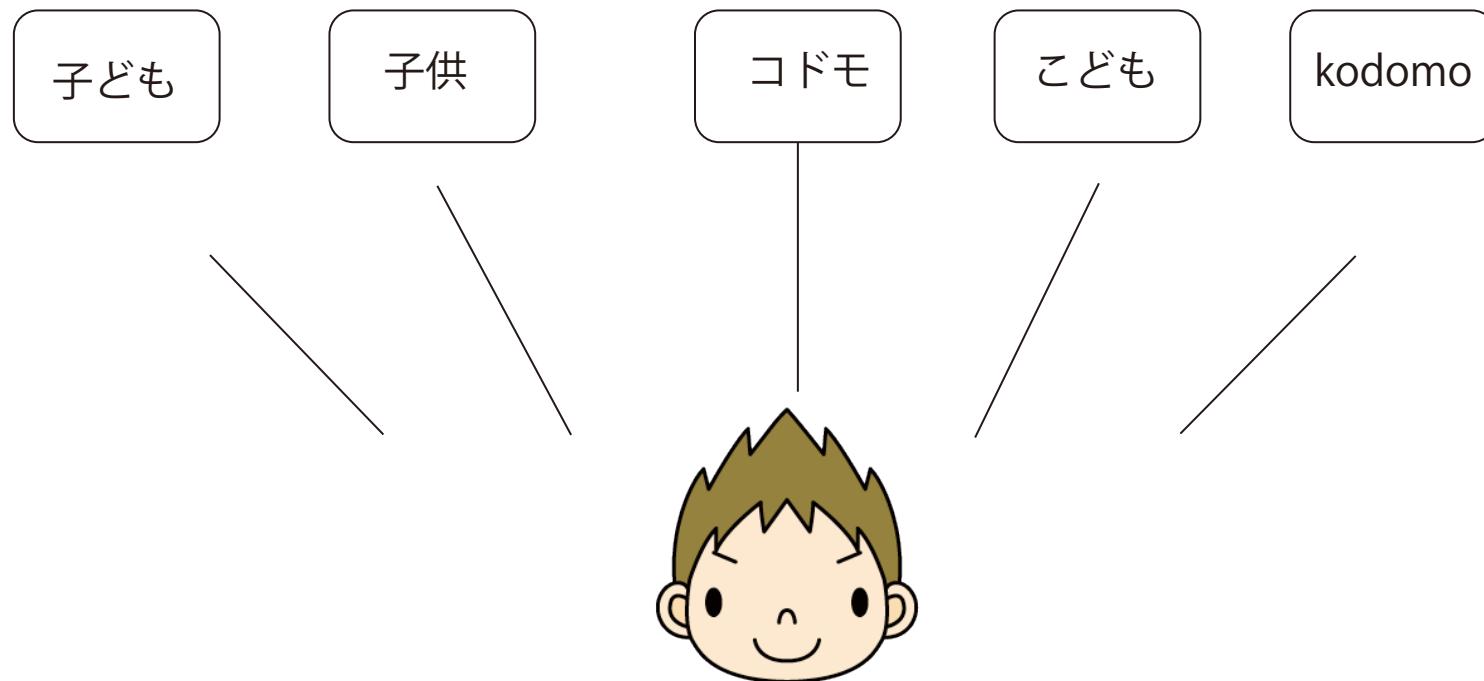


「シニフィエ」(概念)

※ 記号 (=表現されたもの) によって、概念がつくられる (言語論的転回)

「記号表現」と「記号内容」の非対称性 p.72

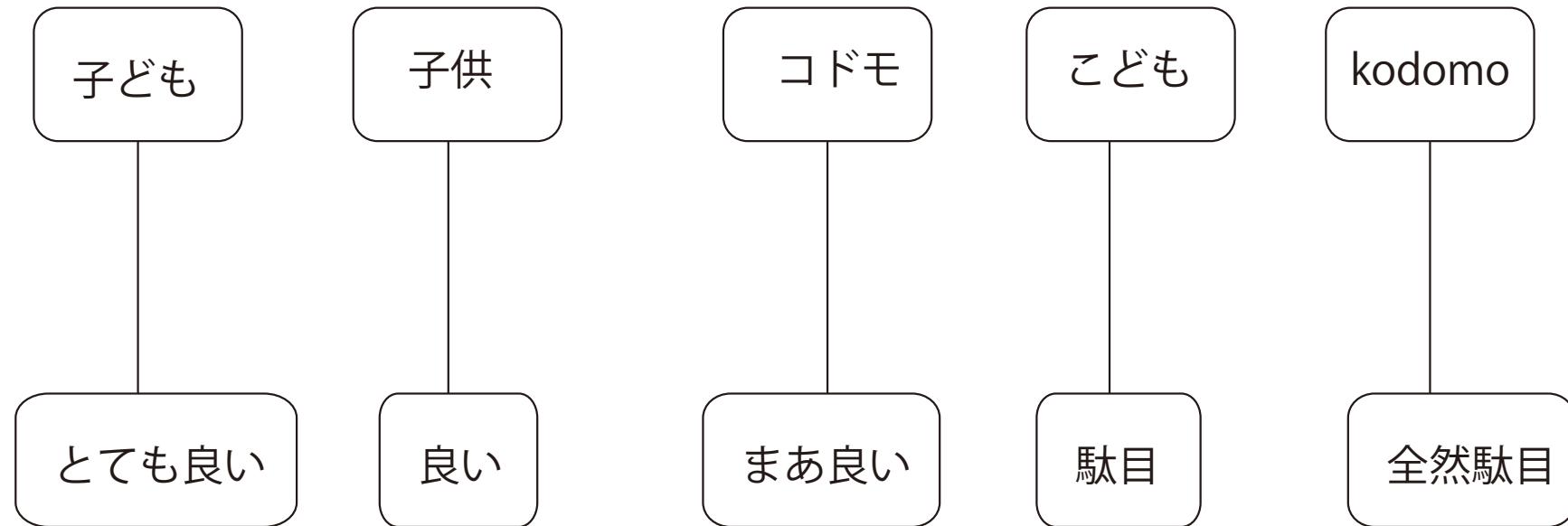
(c.f. p.71)



「大人と対立する意味でその年齢域に達していない人間」を伝達するには、
どのような 記号 としての 〈こども〉でもよい p.71

「記号表現」と「記号内容」の非対称性 p.72

「シニフィアン(感覚可能なもの)」の「異種」 = ※ 表現の可能性 (c.f. p.72)



「いかに効果的に表現するか」を問題とする「シニフィエ(概念, 記号内容)」

「記号表現」と「記号内容」の非対称性 p.73

(c.f. p.72-73)

記号

「記号」 = 単体としての記号 c.f. 73

記号 A

記号 C

記号 B

メッセージ = 「記号」が並べられたもの = 「テクスト」 c.f. 73

「記号」単体 での意味と取るべきか？ 「メッセージ」 での意味か？

→ 「統辞論」の問題 (あとでふれるとのこと)

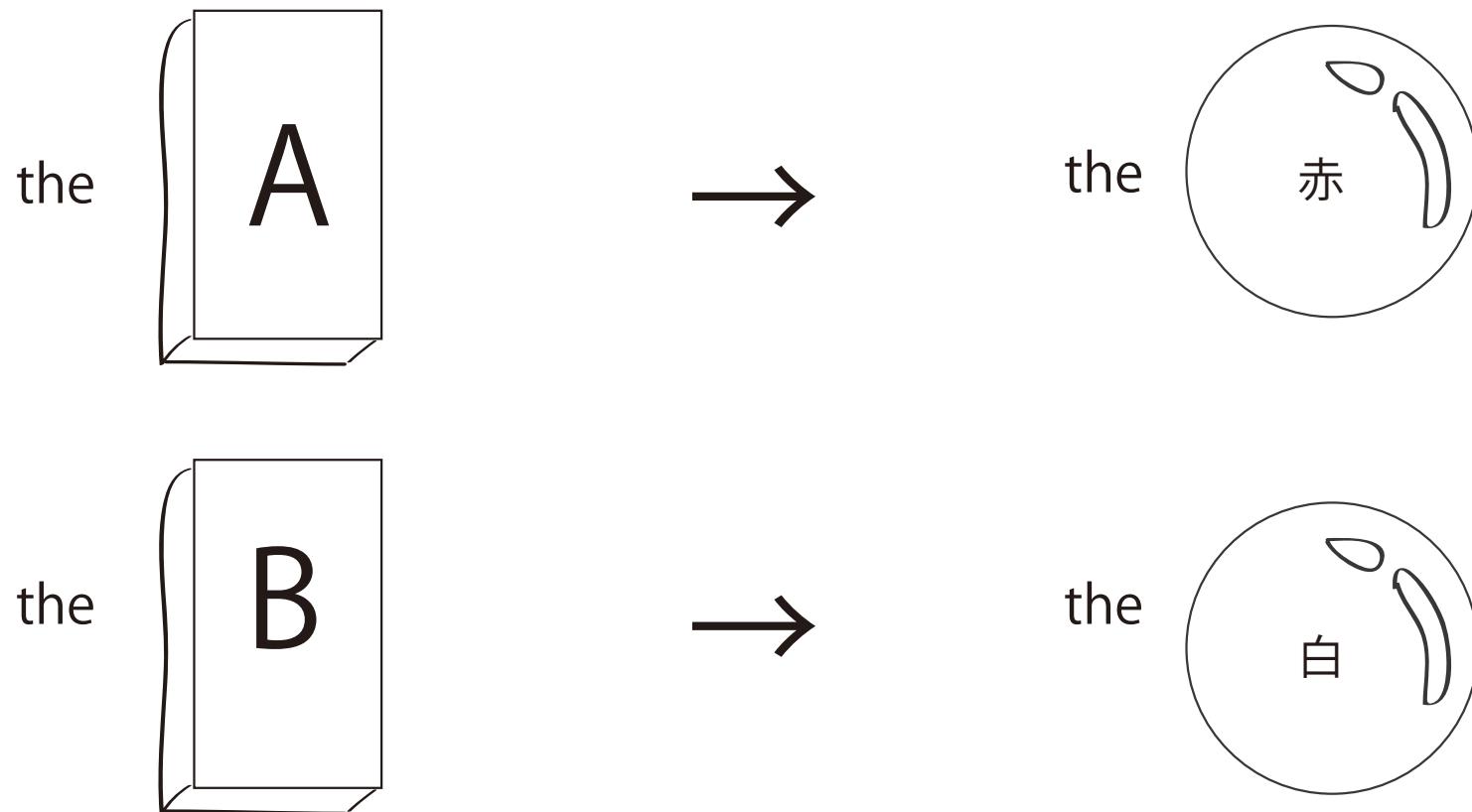
記号における「同じ」と「異なる」 p.73

「記号表現」と「記号内容」との同異を決定づける「視点」

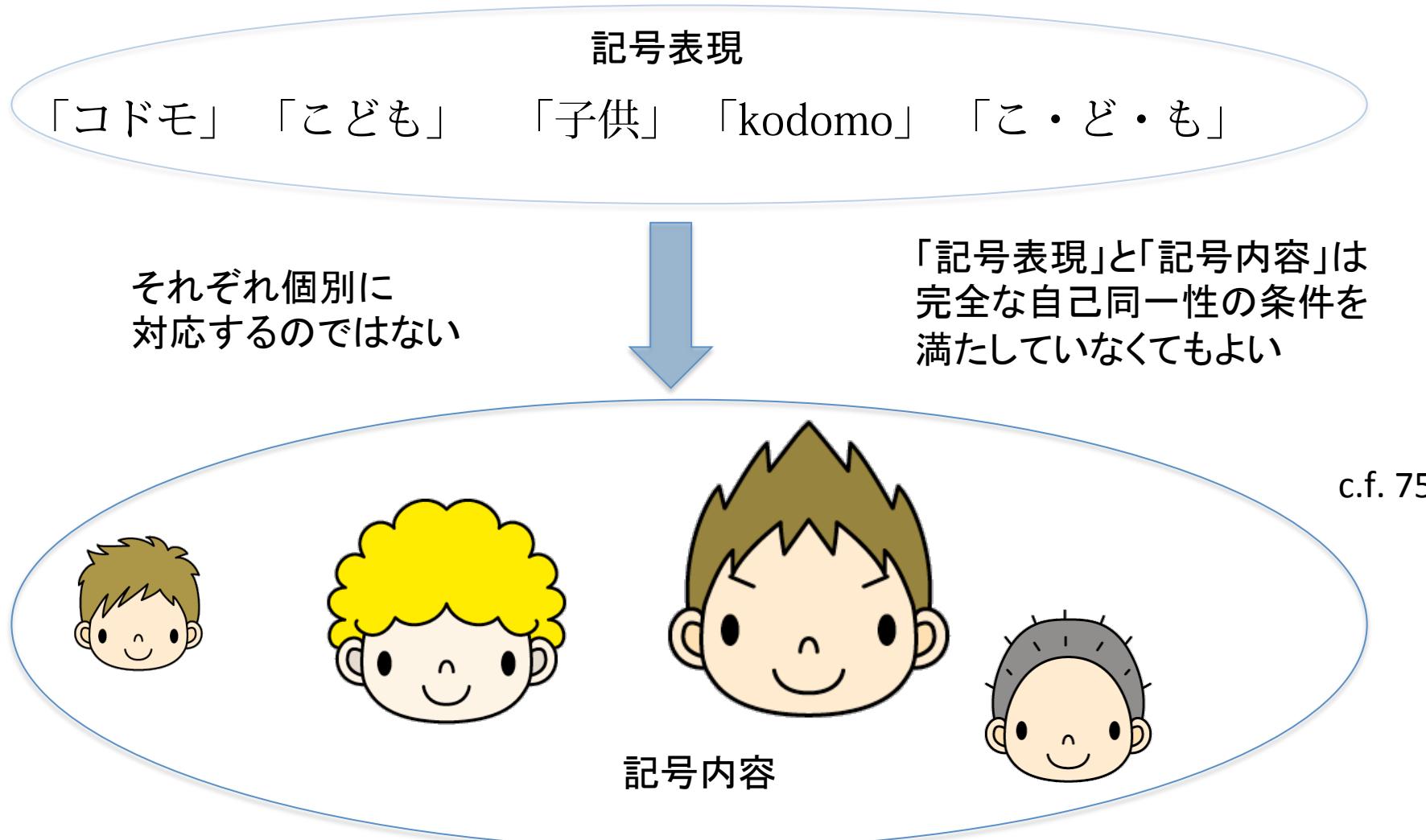
例)

- ・ 「コドモ」の語 (= 記号表現) は、男声・女声を問わず機能する。
(c.f. 75)
- ・  (= 記号内容としての「子供」概念) は、
特定の一個人に限定されず、年齢、性別、体格、国籍など
個別性は捨象される。※ 広く抽象的に使用される。

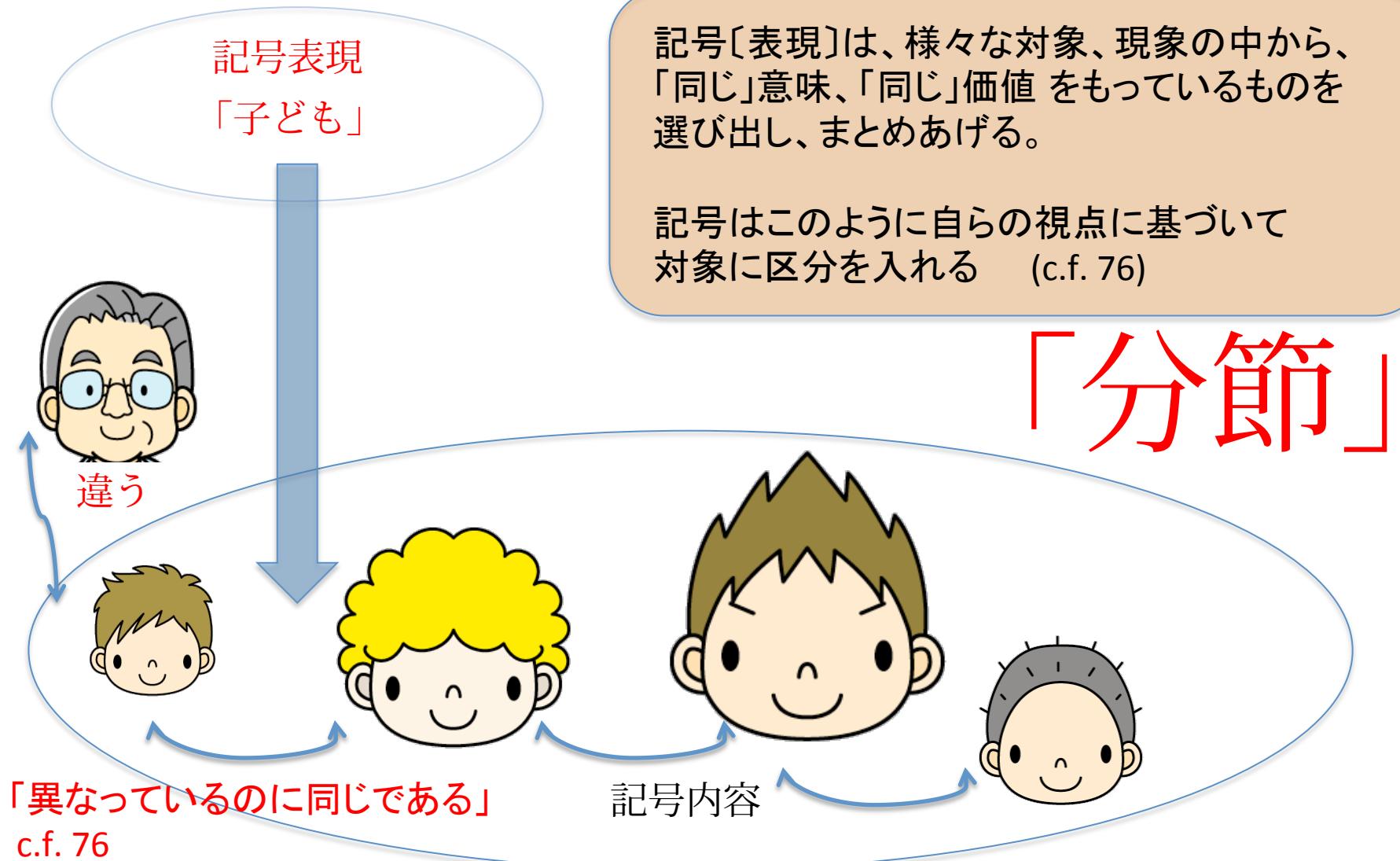
記号における「同じ」と「異なる」 p.73



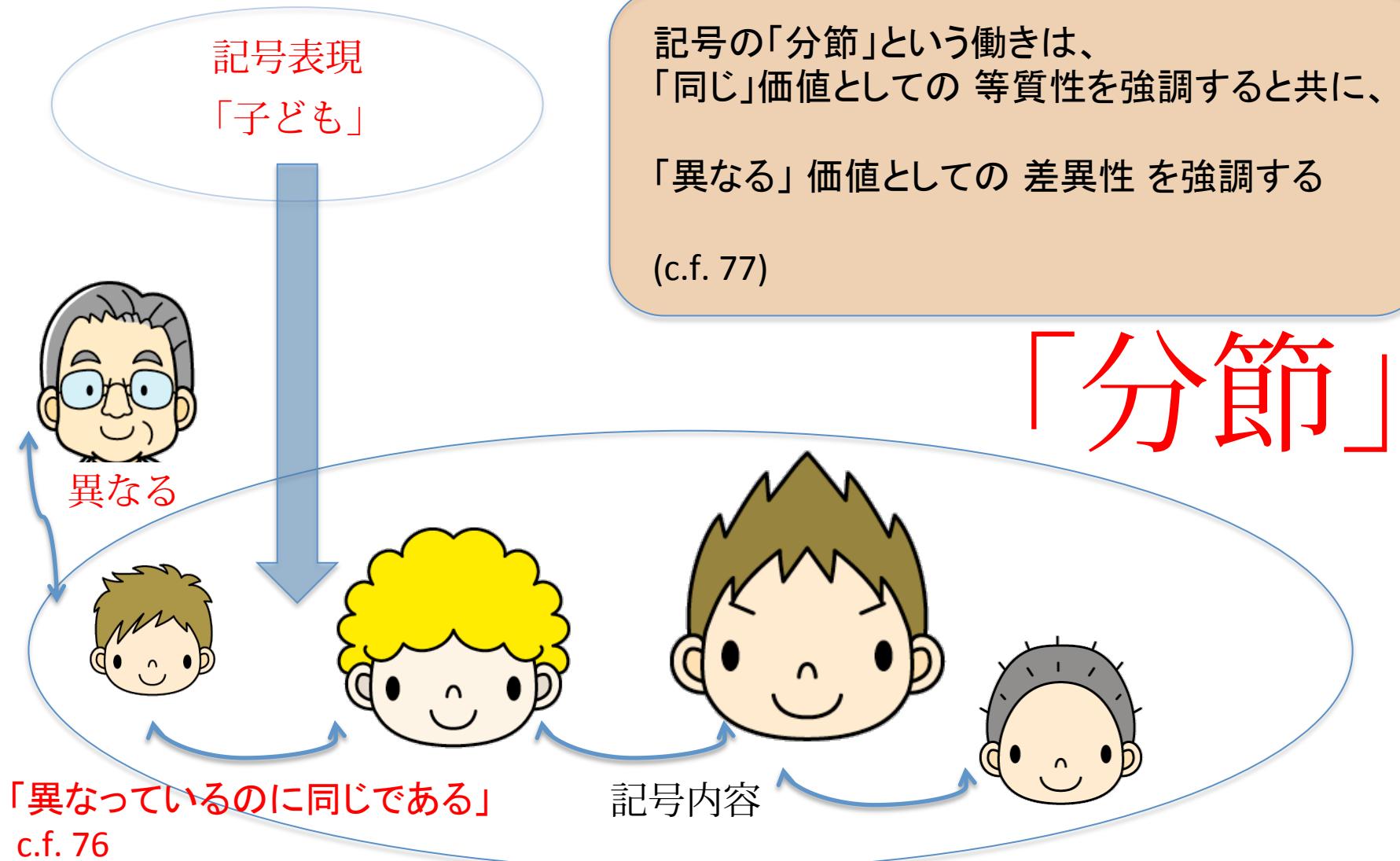
記号における「同じ」と「異なる」 p.73



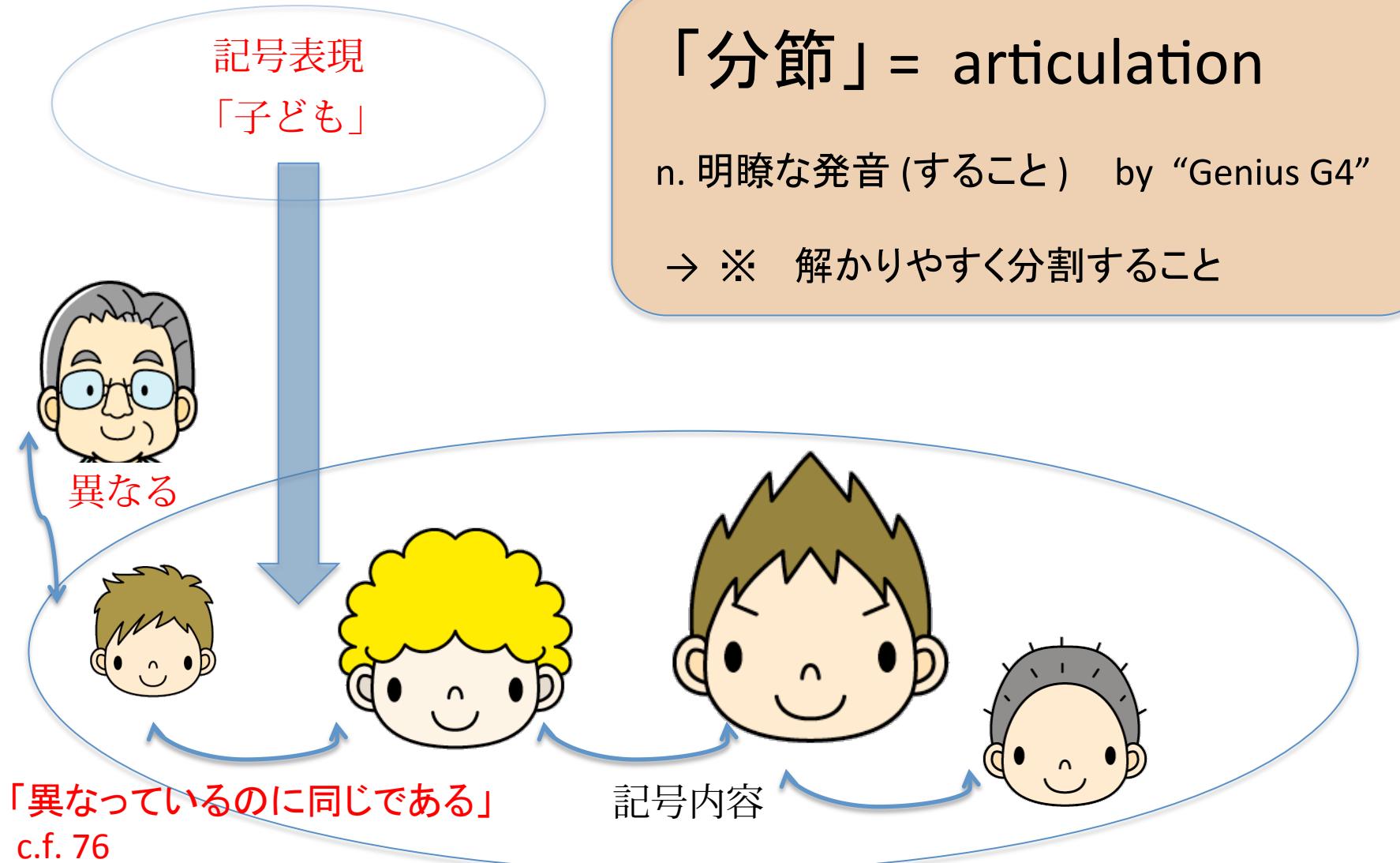
「分節」と「差異」作用 p.76



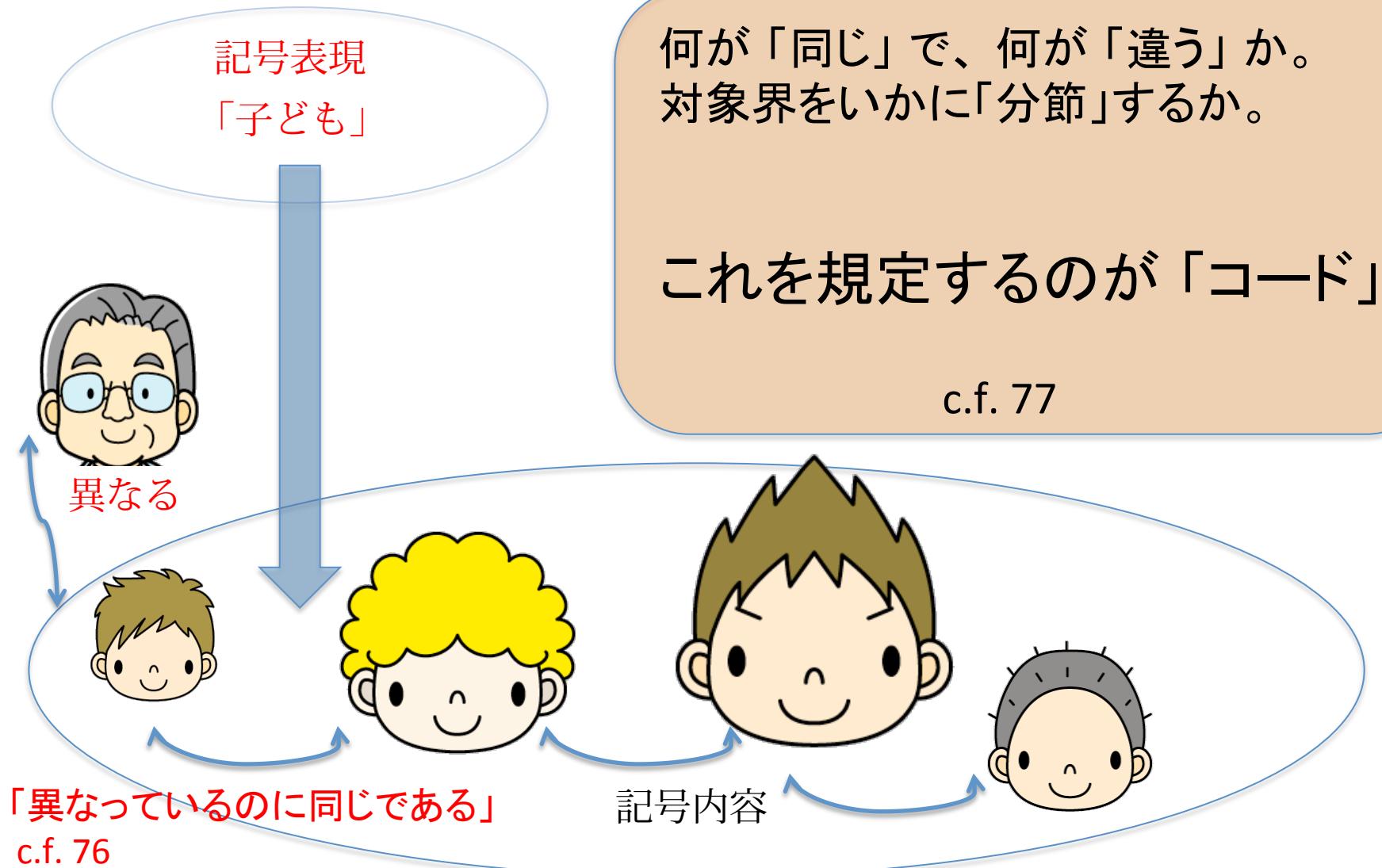
「分節」と「差異」作用 p.76



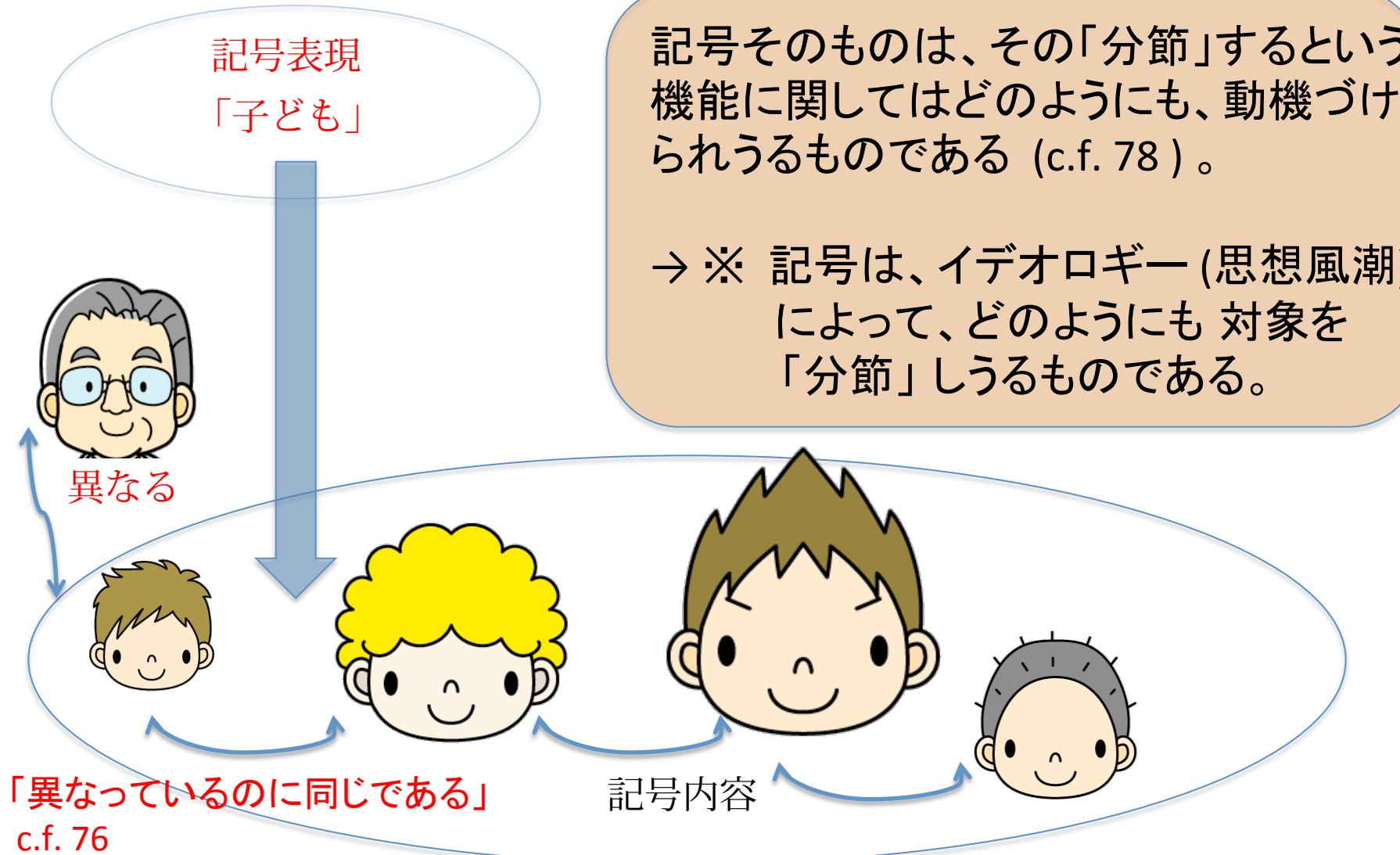
「分節」と「差異」作用 p.76



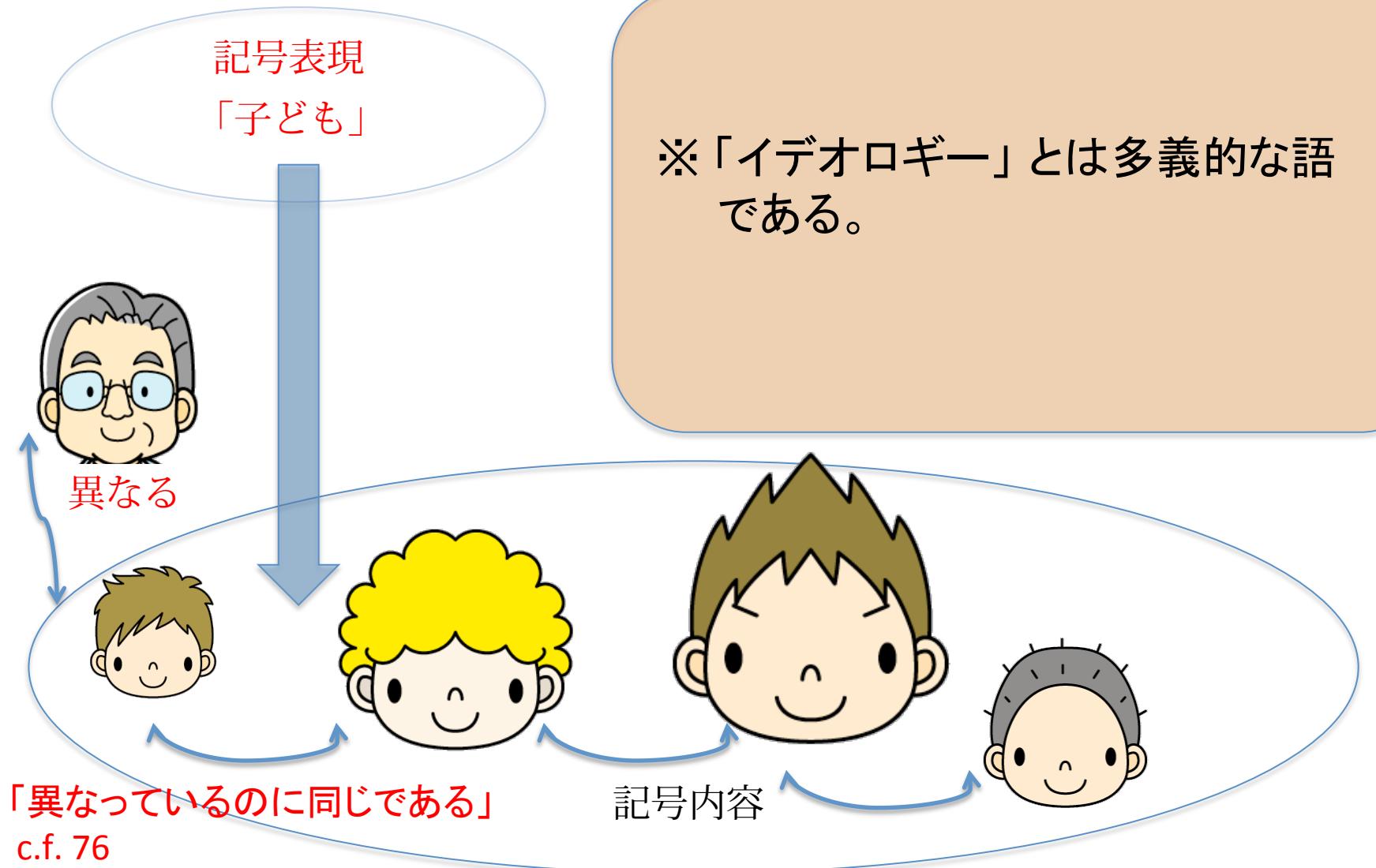
「分節」と「差異」作用 p.76



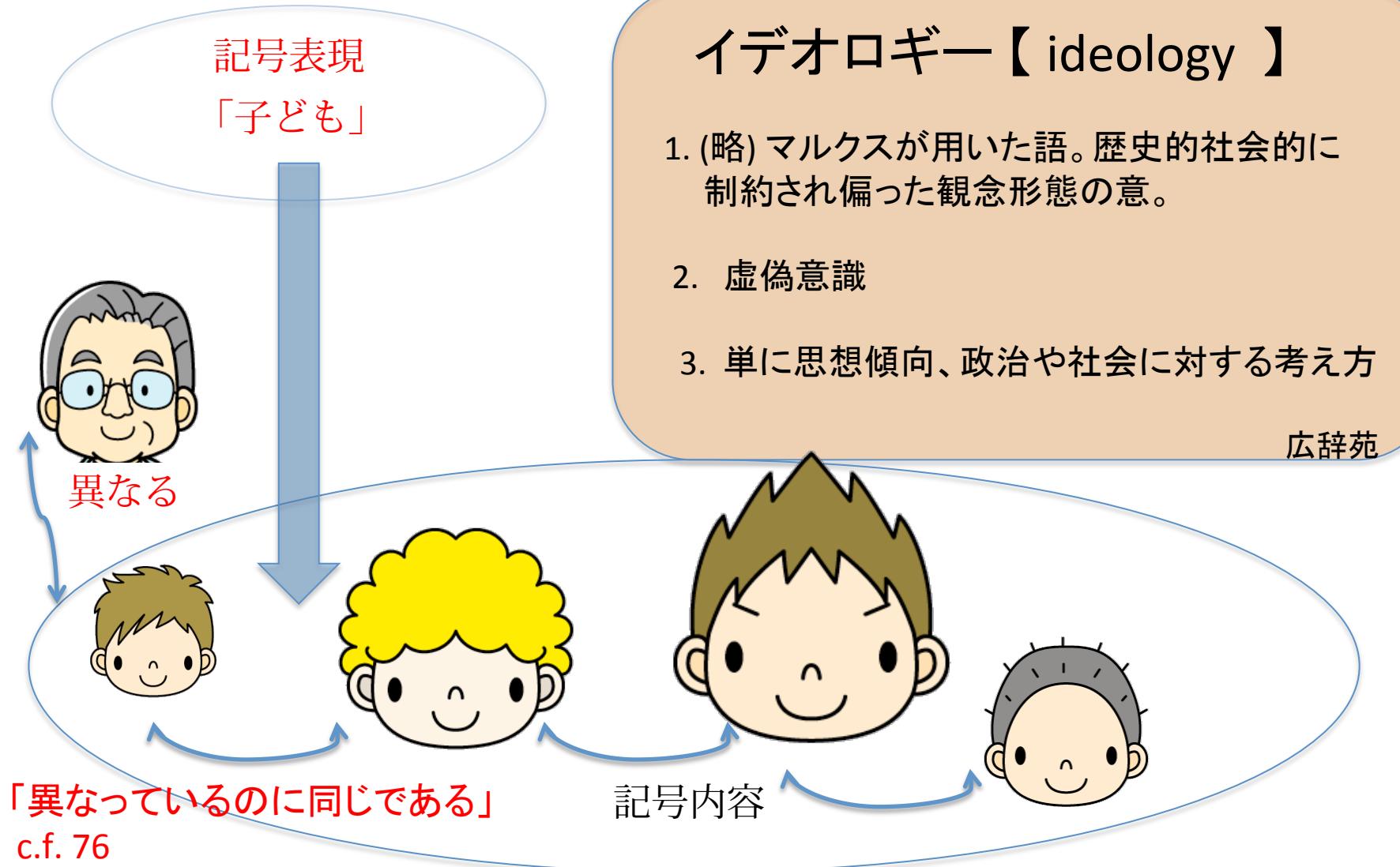
「分節」と「差異」作用 p.76



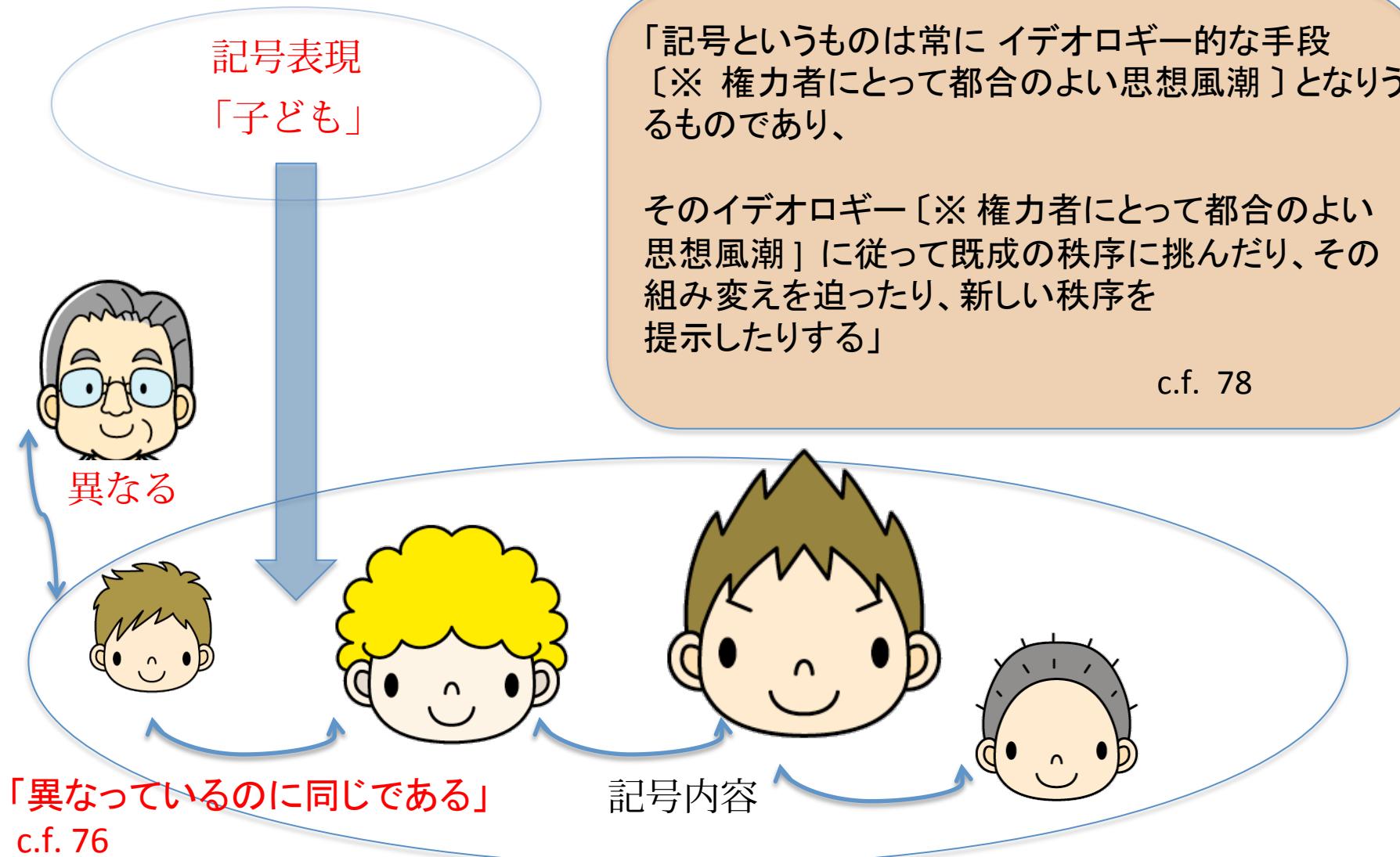
「分節」と「差異」作用 p.76



「分節」と「差異」作用 p.76



「分節」と「差異」作用 p.76



「分節」 articulation のはなし

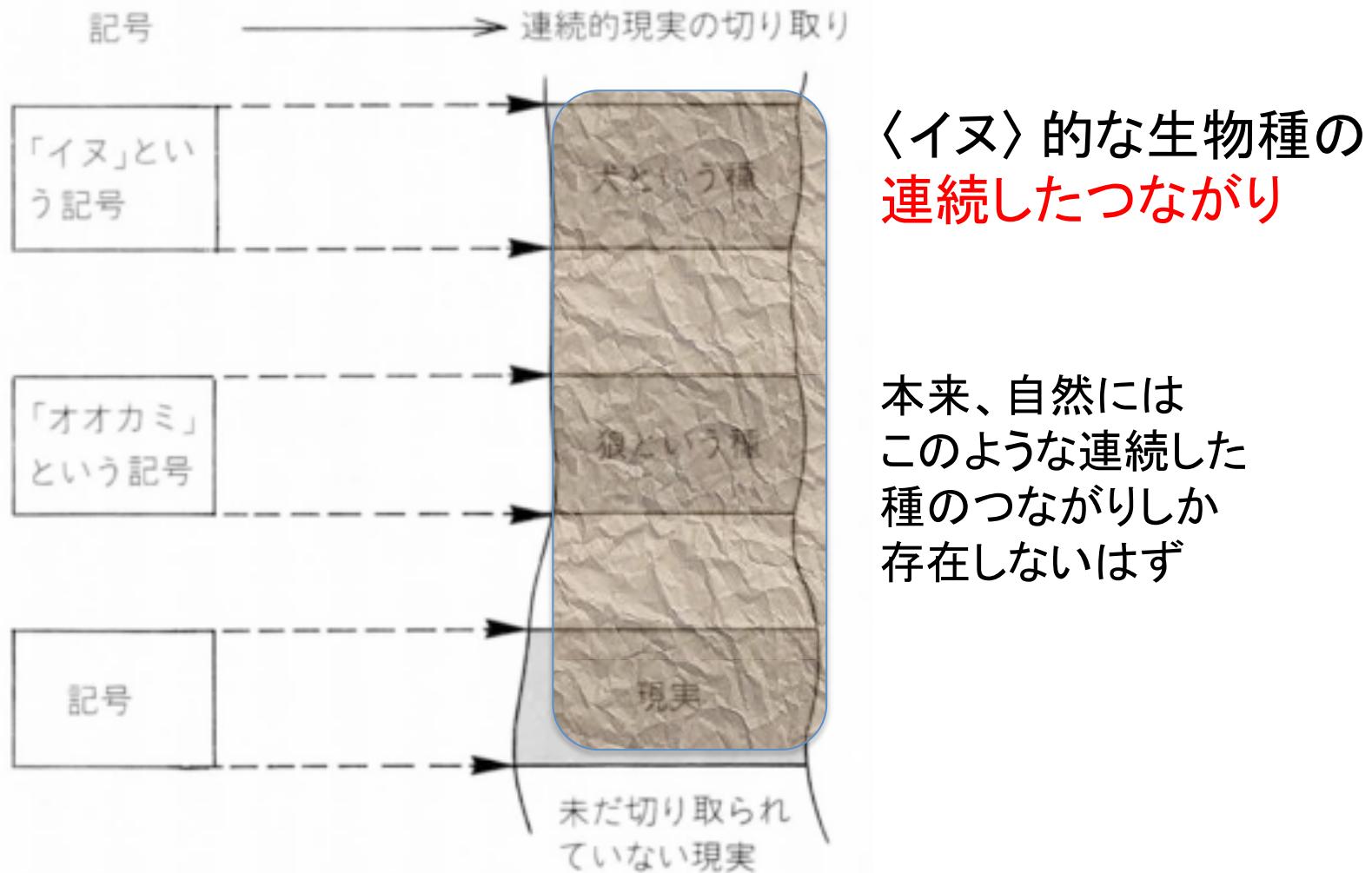
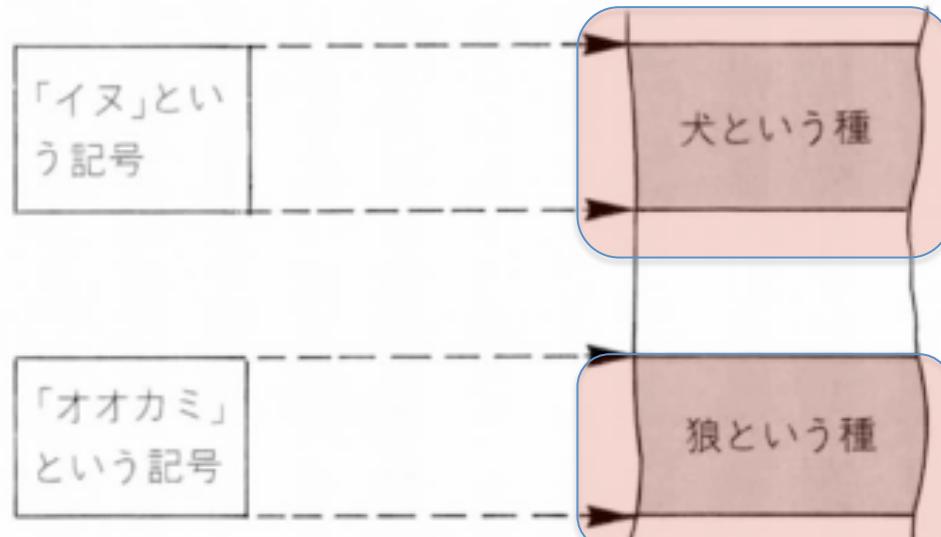


図3 ソシュールの考えた記号と世界

図：土田知則ら『現代文学理論：テクスト・読み・世界』東京：新曜社、1996年、21頁。これを石井が加工。

記号

→ 連続的現実の切り取り



連續した連なりの一部を

「犬」などの 記号を用いて
区分することで、

「犬」の認識が生まれる。

価値観によって外界は区分される
「分節」

図3 ソシュールの考えた記号と世界

「言語名称目録観」

ソシュール以前の外界認識モデル

最初に物などが存在する。
人は物にラベルをつける。
それによって外界を認識する

(外界 = 物など)



犬

(記号 = 言語)

犬

(外界認識)



山犬



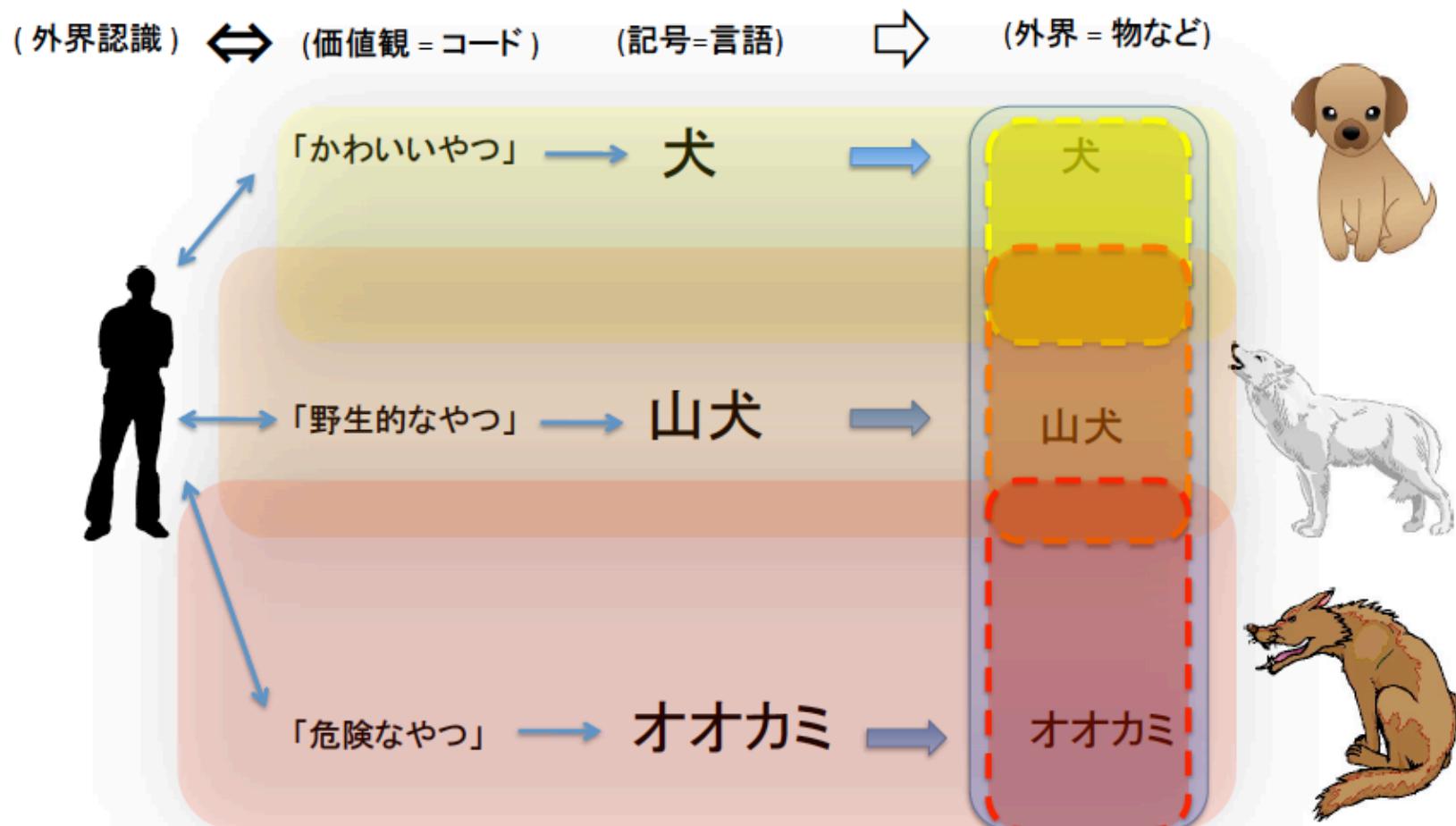
オオカミ



「言語論的転回」以後

ソシュール以後の外界認識モデル、記号論の視点

人の価値観に基づいて
本来は〈区分のない〉外界を
記号を用いて〈区分する〉。
そして外界を認識する。



© Takuyo ISHII (Joshihi Univ.), 2014